ディプロマ・ポリシーの認知度とコロナ禍の学生たちの学び
―学びのゴールを知っていると、主観的な学びの質は高まるのか―

学習支援・教育開発センター　准教授　宮田尚子

1．はじめに

世界中に広がった新型コロナウイルス感染症によって、同志社大学（以下、本学）では、2020年度春学期開講授業科目を原則、ネット配信授業（オンデマンド配信、リアルタイム配信を問わず、授業支援ツールやオンラインミーティング用のビデオ会議アプリなどを活用して実施する遠隔授業を本学ではまとめて「ネット配信授業」とよんでいる）を導入した。その結果、2020年度春学期は、学生だけでなく教職員にとっても、万全に準備できないまま、インターネットを利用した非対面状況での授業に切り替わった。授業のオンライン化によって、教育の提供方法や学び方が大きく様変わりした側面があることは否めないが、学びの質は具体的にどのように変容したのだろうか。

本学では、授業のオンライン化やコロナ禍における学びや大学生活の実態を明らかにするため、在学生を対象としたアンケート調査を、2020年度から2021年度にかけて合計５回実施した。うち３回は臨時調査であり、コロナ禍における学びや大学生活の実態、ネット配信授業の長所や短所、受講状況、授業の受けとめ方などを中心に調査した。残り２回の調査は、毎年度定期的に実施している本学独自の学修行動調査「キャンパスライフに関するアンケート調査」である。ここでは、学部１年次生を対象とした定期調査の結果にもとづき、コロナ禍以前とコロナ禍の学生たちの学びの変化を調べることにする。加えて、学生たちの学びの質を左右する要因として、ディプロマ・ポリシーの認知度に注目して、学生の学習状況や学びの受けとめ方に与える影響をコロナ禍以前とコロナ禍で比較する。

２．コロナ禍前とコロナ禍の学びの変化

2020年度の調査結果をみると、対面授業をあたりまえのように実施していた2019年度以前と比べて、概して“まじめに”勉学に取り組む学生の割合が増えた一方、自身の学びを肯定的に受けとめている学生の割合は激減した。以下、具体的に調査結果をみてみよう。

図１は、１年次生における授業期間中の予習・復習への取り組み状況を入学年度別に示したものである。予習･復習に取り組んだ学生の割合は、2008年度には約４割だったがその後緩やかに増え、2019年度には６割を上回り、最新の調査である2021年度には７割を突破した。コロナ禍以前からすでに“まじめ化”が進行していたものの、授業のオンライン化で授業課題が定期的に提示されるようになったことなどが、予習・復習に取り組む学生の増加につながったと考えられる。

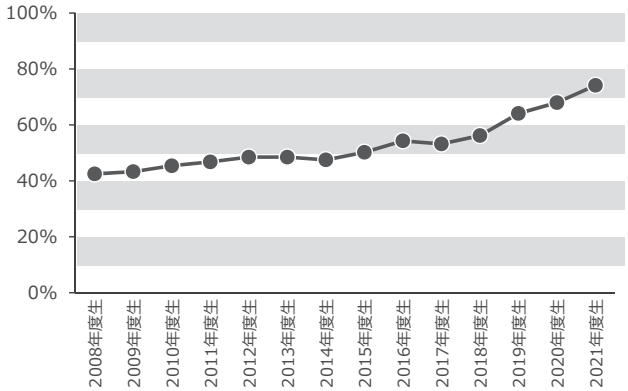
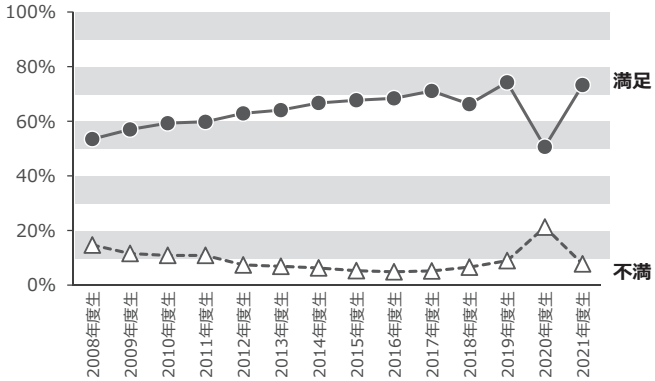


図１　「授業の予習や復習をする」（よくした＋たまにした）１年次生の割合の推移



※「どちらともいえない」との回答は、図示していない。

図２　１年次生の本学の教育全般への満足度の推移

一方、本学の教育全般に対する満足度をみると（図２）、満足している学生の割合は2008年度以降、漸増傾向にあり、2019年度には７割を上回った。しかし、2020年度には満足している学生は約５割にまで落ち込み、逆に不満と回答した学生の割合が２割をこえた。2020年度の教育に対する満足度は、本学の「キャンパスライフに関するアンケート調査」史上、過去最低を記録することになった。翌2021年度には、満足度、不満足度ともに2019年度の水準に回復しており、2020年度における学びの受けとめ方の変化はコロナ禍１年目の一時的なものだったことがよみとれる。コロナ禍１年目の2020年度だけ、満足度が大幅に低下し、不満足度が急上昇した理由や要因について、アンケート調査の自由記述から垣間見ることができる。たとえば、学内における、学部間や授業科目担当教員間の差異にもとづく不公平感、他大学の学生と比較して抱く不満など、自分と同じような境遇にある誰かと自分を比べることで抱く相対的な不満が数多くみられた。また、授業に関する連絡手段やネット配信授業で使用するシステムが複数あることによる煩雑さ、戸惑いも不満の一因になったようだ。「思い描いていた大学生活とは違った」「納得がいくような学びができなかった」という“悔しさ”が不満につながっている学生も少なからずいることがうかがえた。コロナ禍２年目の2021年度、本学では2020年度の経験を踏まえ、履修登録をおこなう専用システムの改修、授業支援ツールの増強などの教育支援体制や学生支援体制を少しずつではあるが改善、強化を図った。その甲斐もあったのか、授業や授業支援ツールなどに関して見直しや改善を求める声は、2020年度に実施した「キャンパスライフに関するアンケート調査」や臨時で実施した学生調査と比べれば、2021年度の「キャンパスライフに関するアンケート調査」では幾分、和らいだ。

３．学生は在学中の“学びのゴールとロードマップ”を知っているか

大学入学前に抱いていた期待と入学後の現実のギャップに戸惑った学生はコロナ禍以前にもいたと思われるが、2020年度入学生は、特にギャップが大きかっただろう。コロナ禍という社会状況に加えて全面的な授業のオンライン化によって、学び方（“大学でどのように学ぶか”）が、突然大きく変わってしまった。だが、大学が掲げる教育目標（“大学で何を学ぶか”）については、授業をオンライン化したからといって大きく変わることはなかった。本学ではディプロマ・ポリシー[1)]（以下、DP）、カリキュラム・ポリシー（以下、CP）を学科ごとに定め、公式ウェブサイトで公表しているだけでなく、履修科目登録の際に学生が目を通す履修要項にも明記している。つまり、学生は

DPやCPをもとに“大学在学中に何を学び、どのような能力・スキルを身につけることができるのか”という教育方針を、所属学科という最も身近な単位にもとづき、専門領域と関連づけて具体的に知ることができる状態にあったといえる。

DPやCPの認知度は、大学在学中の学びに関する達成目標つまり卒業時に何ができるようになるのか、そのために大学で何を学び、どのような内容の授業をどのような方法で受講するのか、といった在学中の“学びのゴールとそのためのロードマップ”をどの程度知っているかの指標だといえるだろう。DPを知っている学生ほど、学びに対する期待感と学びに関する達成目標のすり合わせができており、大学での学びのゴールが明確になっていると想定されるので、そのゴールを見据えて、積極的に学びに取り組むことができるのではないだろうか。学びの取り組み状況に違いがあれば、その結果として、提供される教育の受けとめ方や学びに対する意味づけや価値づけにも差異が生じることが予想される。

では、実際にDPの認知度によって学生たちの学びは異なっていたのだろうか。本稿では、学生が“学びのゴールとロードマップ”を知ったうえで授業に臨んだかどうかによって、学びの状況と学びの受けとめ方がどのように異なるのかを、コロナ禍以前に入学した2019年度生、コロナ禍に入学した2020年度生、2021年度生の３学年分のアンケート調査データにもとづいて明らかにする[2)]。DPの認知度と学生の主観的評価にもとづく“学びの質”の関連を分析することで、対面授業かネット配信授業かといった授業形態とは違った視点から、学びの質を高める方策について検討することができるだろう。

分析に先立って、本学の１年次生のDPの認知状況について確認しておく。図３は、2019年度生、2020年度生、2021年度生それぞれの１年次時点でのDPの認知度を示したものである。DPを「よく知っている」学生の割合は、約１割にとどまり、この３年間で大きな変化はみられない。「少し知っている」学生の割合は、2019年度生は３割だったが、それと比べて2020年度生と2021年度生では10ポイントほど高く、約４割を占める。一方、「まったく知らない」と回答した学生の割合は、この３年間に漸減している。このことから、この３年のあいだに、本学の１年次生のDPの認知度は高まっているといえる。

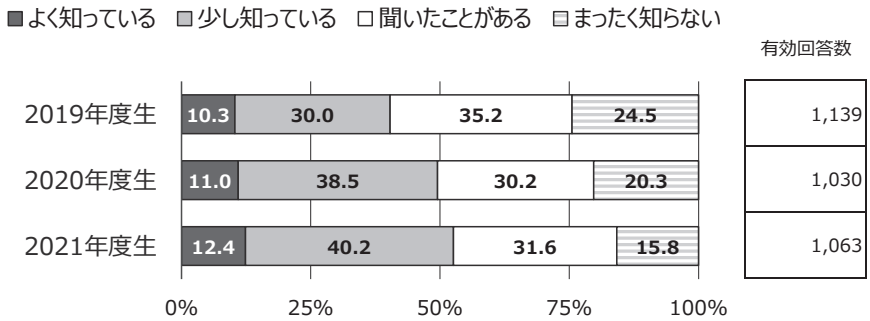


図３　１年次生のディプロマ・ポリシー（DP）の認知度

４．DPの認知度と学びの取り組み状況

DPの認知度によって、授業に関する学びの取り組み状況に違いはあるのだろうか。授業に関する学びの取り組み状況を、履修前の行動（「A：科目登録する際にシラバスを読んで授業内容を確認する」）、授業中の学習行動（「B：授業資料に記載がないことや、黒板に書かれなかったことでも、教員が口頭で説明したことについて、ノートやメモを取る」「C：授業をつまらなく感じる」）、授業外の学習行動（「D：授業の予習や復習をする」「E：授業内容を、他の授業で学んだ知識・考え方や、世の中で起こっている出来事・問題と関連づけて考える」）の３つの観点からみていく。

なお、「E：授業内容を、他の授業で学んだ知識・考え方や、世の中で起こっている出来事・問題と関連づけて考える」は、授業のオンライン化が学生たちの学びに与えた影響を調べるために、2020年度以降新たに用意した調査項目のため、2019年度調査と比較することはできない。

図４は、DPの認知度別（「よく知っている」「少し知っている」「聞いたことがある」「まったく知らない」）に、授業に関する学びの取り組み状況に関するA ～ Eの各設問の平均値を示したものである。各設問（質問文）に対して肯定的な内容の選択肢ほど、点数が高くなるように得点化したうえで平均値を算出した。したがって、平均値が高いほど各設問に対して肯定的な回答傾向にあるとみなすことができる。「C：授業をつまらなく感じる」については設問が逆転項目のため、平均値が高いほど授業をつまらないと感じる頻度が高く、平均値が低いほど授業をつまらないと感じる頻度が少ないことになる。

調査年度にかかわらず、DPの認知度が高い学生ほど「A：科目登録する際にシラバスを読んで授業内容を確認する」頻度も高い。大学在学中の学修に関する達成目標を

知っている学生ほど、履修前に授業内容をしっかり確認してから科目登録していることがよみとれる。シラバスに記載された各科目のねらいや、到達目標、授業計画、成績評価方法などを把握したうえで履修したほうが、何も知らずに履修するよりも、当該科目に対する学習意欲や当該科目を受講することへの納得感は高いと考えられる。同じ内容の授業を受講しても、学習意欲や納得感が高い学生のほうが、学生本人の主観的な“学びの質”も高くなることは想像にかたくない。

入学年度	DPの認知度	A 科目登録する際にシラバスを読んで授業内容を確認する	B 授業資料に記載がないことや、黒板に書かれなかったことでも、教員が口頭で説明したことについて、ノートやメモを取る	C 授業をつまらなく感じる	D 授業の予習や復習をする	E 授業内容を、他の授業で学んだ知識・考え方や、世の中で起こっている出来事・問題と関連づけて考える
2019年度生	よく知っている	3.63	3.40	2.57	2.99	
	少し知っている	3.52	3.27	2.57	2.89	
	聞いたことがある	3.52	3.18	2.63	2.77	
	まったく知らない	3.32	2.96	2.95	2.57	
	F値（p値）	6.24 (p値 = .000)	11.51 (p値 = .000)	14.41 (p値 = .000)	10.12 (p値 = .000)	
2020年度生	よく知っている	3.76	3.54	2.65	3.15	2.87
	少し知っている	3.46	3.36	2.67	2.93	2.67
	聞いたことがある	3.32	3.12	2.89	2.72	2.41
	まったく知らない	3.11	2.97	2.91	2.57	2.45
	F値（p値）	18.81 (p値 = .000)	16.93 (p値 = .000)	6.35 (p値 = .000)	16.54 (p値 = .000)	9.94 (p値 = .000)
2021年度生	よく知っている	3.77	3.60	2.49	3.07	3.11
	少し知っている	3.68	3.42	2.64	3.00	2.79
	聞いたことがある	3.58	3.34	2.81	2.78	2.54
	まったく知らない	3.49	3.17	3.00	2.60	2.47
	F値（p値）	12.02 (p値 = .000)	17.80 (p値 = .000)	29.05 (p値 = .000)	26.09 (p値 = .000)	37.33 (p値 = .000)

A～D: よくした=4、たまにした=3、あまりしなかった=2、まったくしなかった=1 に得点化して、平均値を算出した。
E: ひんぱんにあった=4、ときどきあった=3、数回あった=2、まったくなかった=1 に得点化して、平均値を算出した。

図４　１年次生のDPの認知度と授業に関する学びの取り組み状況

実際、調査年度にかかわらず、授業中の学習行動も授業外の学習行動も、DPの認知度の高い学生のほうが意欲的に取り組んでいる。DPを「よく知っている」学生のほうが、「まったく知らない」学生よりも、「B：授業資料に記載がないことや、黒板に書かれなかったことでも、教員が口頭で説明したことについて、ノートやメモを取る」頻度が高く、「C：授業をつまらなく感じる」ことは少ない。このように、同じ授業内容であっても、授業中にインプット（吸収）する量や質が異なっていることがうかがえる。授業外の学習行動をみても、DPの認知度の高い学生ほど「D：授業の予習や復習をする」頻度が高く、「E：授業内容を、他の授業で学んだ知識・考え方や、世の中で起こっている出来事・問題と関連づけて考える」傾向にある。予習・復習をつうじて授業の内容をふり返ったり繰り返し学習したりするということはそれだけ、学びの「量」も多いといえるだろう。さらに、授業での学びを他の授業科目や実社会における現象と結びつけて考えることは、学生が授業で得た知識を活用して、主体的な深い学びにつなげていると予想される。別の見方をすれば、DPを「まったく知らない」

で授業を受けている学生は、そうでない学生よりも受動的な学びになりやすいと考えられる。

5．DPの認知度と学びの受けとめ方

つづけて、DPの認知度と学びの受けとめ方の関連についてみていこう。ここでは、能力・スキルの獲得実感（「F：『批判的に考える力』が入学後にどの程度身についたと感じているか」「G：教材・資料や動画をもとに課題をこなすだけで、全体のつながりを把握する力や、内容を掘り下げる力が身についたという手応えは希薄だった」）、学びの充実度（「H：大学で学ぶことは楽しい」「I：自分が授業に参加していると実感できた」）、教育満足度（「J：本学の教育全般への満足度」）の３つの側面から学びの受けとめ方を確認した。その結果が図５である。図５も、図４と同様、各設問（質問文）に対して肯定的な内容の選択肢ほど、点数が高くなるように得点化したうえで平均値を算出したものである。したがって、平均値が高いほど各設問に対して肯定的な回答傾向にあるとみなすことができる。

なお、「F：批判的に考える力」「J：本学の教育全般への満足度」は、コロナ禍以前の2019年度調査と比較可能だが、残りの３つの指標については授業のオンライン化が学生たちの学びに与えた影響を調べるために、2020年度以降新たに用意した調査項目のため、2019年度調査と比較することはできない。

		F 批判的に考える力	G 教材・資料や動画をもとに課題をこなすだけで、全体のつながりを把握する力や、内容を掘り下げる力が身についたという手応えは希薄だった	H 大学で学ぶことは楽しい	I 自分が授業に参加していると実感できた	J 本学の教育全般への満足度
2019年度生	よく知っている	3.11				4.24
	少し知っている	2.96				4.01
	聞いたことがある	2.81				4.01
	まったく知らない	2.68				3.65
	F値（p値）	10.58 (p値 = .000)				12.93 (p値 = .000)
2020年度生	よく知っている	2.95	3.04	3.33	2.63	3.73
	少し知っている	2.78	2.99	3.04	2.65	3.46
	聞いたことがある	2.63	3.12	2.83	2.45	3.28
	まったく知らない	2.49	3.07	2.56	2.17	2.92
	F値（p値）	8.61 (p値 = .000)	1.24 (p値 = .296)	22.18 (p値 = .000)	11.89 (p値 = .000)	17.44 (p値 = .000)
2021年度生	よく知っている	3.04	2.70	3.45	3.25	3.99
	少し知っている	2.92	2.76	3.22	3.01	3.92
	聞いたことがある	2.78	2.89	3.01	2.80	3.69
	まったく知らない	2.68	2.99	2.90	2.61	3.50
	F値（p値）	13.96 (p値 = .000)	8.06 (p値 = .000)	35.32 (p値 = .000)	36.77 (p値 = .000)	26.38 (p値 = .000)

F: 身についた=4、やや身についた=3、あまり身につかなかった=2、身につかなかった=1 に得点化して、平均値を算出した。
G～I: 非常にそう思う=4、どちらかといえばそう思う=3、どちらかといえばそう思わない=2、まったくそう思わない=1 に得点化して、平均値を算出した。
J: 満足している=5、どちらかといえば満足している=4、どちらともいえない=3、どちらかといえば不満である=2、不満である=1 に得点化して、平均値を算出した。

図５　１年次生のDPの認知度と学びの受けとめ方

調査年度にかかわらずDPの認知度が高いほど、「F：批判的に考える力」の獲得実感も高い。一方、「G：教材・資料や動画をもとに課題をこなすだけで、全体のつながりを把握する力や、内容を掘り下げる力が身についたという手応えは希薄だった」については、調査年度によって回答傾向が異なる。2021年度生は、DPの認知度が低いほど、能力・スキルの獲得実感も希薄な傾向にあるが、2020年度生についてはDPの認知度と能力・スキルの獲得実感のあいだに差はみられない。2020年度は授業のオンライン化にともなって各授業担当教員が学生の理解度を把握するために、毎回のように課題を出す状況になり、本学に限らず、多くの大学で学生たちは膨大な課題に追われることになった。いわゆる「課題地獄」（堀 2021）である。本学では、マスメディアの報道だけでなく、学生に対するアンケート調査をつうじて学生たちの生の声が教員に伝わるにつれて、学内会議などをつうじて教員間で情報共有がなされることになり、徐々に「課題地獄」は緩和されるようになった。実際、本学の「キャンパスライフに関するアンケート調査」の結果をみても、2020年度と比べて2021年度は課題の量に対する負担感は軽減している（図表は割愛）。「課題地獄」の緩和は、アンケート調査などをつうじて学生たちが声をあげた結果、事態が「改善」された代表的な事例といえるだろう。

次に、学びの充実度についてみていこう。コロナ禍以前の状況はデータがないのでわからないが、コロナ禍に入った2020年度、2021年度ともに、DPの認知度が高い学生ほど「H:大学で学ぶことは楽しい」と回答している。特に、2020年度生ではDPを「よく知っている」学生と「まったく知らない」学生で、約0.8ポイントも開いている。授業参加実感に関してみると、DPを「まったく知らない」学生ほど「I：自分が授業に参加している」という実感が希薄なのに対して、DPを「よく知っている」あるいは「少し知っている」学生は授業参加実感が概して高い。このように、大学での学びの目的や達成目標を意識している学生は、ネット配信授業の下でも、対面授業とネット配信授業が混在する状況になっても、大学での学びそれ自体を楽しみ、参加実感をもって授業に取り組むことができているようだ。

教育満足度を比較しても、いずれの調査年度においても、DPを「よく知っている」学生のほうが「まったく知らない」学生よりも「J：本学の教育全般への満足度」が高い傾向にある。なかでも、2020年度生でDPの認知度による教育満足度の差が大きい。

以上の結果をまとめると、一部例外がみられるものの、DPの認知度が高い学生ほど、大学での学びを肯定的に受けとめていることがよみとれる。上述したように、DPの認知度の高い学生ほど授業に対して意欲的、主体的に取り組んでいる傾向にあり、そ

のような学習行動の結果、自らの学びを肯定的に評価することにつながっていると考えられる。DPのなかみ、つまり大学での学びのゴールを知っていると、学生たちの主観的な学びの質が高まるといえるだろう。

6．大学で学ぶことについての学生と教員、教員間の共通理解の醸成に向けて

本稿では、本学独自の学修行動調査「キャンパスライフに関するアンケート調査」の各入学年度の１年次生の回答にもとづいて、コロナ禍以前とコロナ禍の学生たちの学びの変化を調べるとともに、DPの認知度別に、大学での学びの取り組み状況や受けとめ方に差があるのかを検討した。その結果、予習や復習に“まじめに”取り組む学生はコロナ禍以前から増加していたが、その傾向はコロナ禍でも堅調に高まっていた。一方で、教育満足度はコロナ禍１年目の2020年度だけ一時的に大きく低下していることがわかった。また、一部例外はあるものの、概して、DPをよく知っている学生ほど、授業内外で、主体的に勉強に取り組んでおり、大学での学びに対して肯定的にとらえていることが明らかになった。加えて、その傾向はコロナ禍以前であっても、コロナ禍であっても、共通してみられた。

これらの分析結果は、学習者が自らの学びの目的を理解し、自覚的に学びに取り組むことで学習者の主観的な学びの質を高めることが期待できることを示唆する。そしてそれは、中央教育審議会大学分科会が「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」において高等教育改革の実現すべき方向性として提示した「高等教育機関がその多様なミッションにもとづき、学修者が『何を学び、身に付けることができるのか』を明確にし、学修の成果を学修者が実感できる教育を行」うための基盤にもなりうると考えられる。

もちろん、コロナ禍における学習の質や教育の質を検討するうえで、2020年に拡大した新型コロナウイルス感染症による授業のオンライン化が学生たちの学びに与えたインパクトを明らかにすることは、重要だろう。授業がオンライン化したことで、従来おこなわれていた対面授業とは、授業が提供される方法や学生たちの学び方も含め、大学生活が全般的に大きく様変わりしたのは周知の事実である。実際、オンライン授業の長所や利点、短所や課題を明らかにするための調査研究も多くなされている。授業が対面状況でおこなわれるのかオンラインでおこなわれるのかは、学びの質を大きく左右する問題だろう。集中力や学習意欲、理解度は、教員に質問をすぐにできるか、

一緒に学ぶ友だちが同じ空間にいるか、学生と教員が互いに安定した通信環境を確保できるかといった受講環境に影響されるだろうが、個々の学生の“好み”の学習スタイルと授業形態の合致度にも影響されるだろう。そうなると、対面かオンラインかの単純な二分法ではなく、何が「最適解」なのかは状況によってまったく異なってくる。

また、なかには、オンライン授業に起因するわけではなく、授業の構成や実施体制などの問題がオンライン授業を通して顕在化した問題もある（光本 2021; 森 2021）。その一例として、単位制度の実質化が挙げられるだろう。コロナ禍において学生の理解度などを確認するために、多くの授業で課題提出が求められ、多くの学生が「課題地獄」に見舞われる事態になった。一方で、授業課題は学生たちに予習・復習をおこなうことを促し、授業時間外の学習時間を確保することにつながった。結果的に、1単位標準45時間の学修を必要とする、という大学設置基準の規定に現実を近づけることになったともいえる。法定の学習時間と、現実に学生が取り組む学習時間のあいだに大きな乖離があったことは、コロナ禍以前から高等教育関係者の一部では指摘されていたものの、「蓋をされていた（見て見ぬ振りをされていた）問題」（服部 2021: 22）だった。それが、コロナ禍における授業のオンライン化によって表面化したというわけである。

たとえば、コロナ禍における大学生の学びに関するインタビュー調査にもとづいて、授業課題に対する学生たちのとらえ方を分析した服部（2021）によると、多くの学生は授業課題を負担に感じていたが、授業課題の良し悪しを量だけで判断していたわけではないという。学生たちは、自分にとってその課題が有益かどうかという観点から、具体的には、授業内容をふり返り定着を図ることのできるような課題や、自分の考えが深まったり視野が広がったりするような課題の場合にはプラスに評価していた（服部 2021）。このことは、授業課題への取り組みに関しても、単位制度における学習時間の計算のしかたに関しても、学生たちがその目的を理解し納得し、主体的に意味づけることが、大学での学びをより充実したものにすることを示唆している。服部（2021）は、学生が理解する機会があるということは、大学で学ぶことについての学生と教員の共通理解に貢献することにつながるのではないか、と投げかけている。この共通理解の程度が、学生にとっての授業や大学で学びの納得感を大きく左右すると思われる。「教員が教育の授業に対する考え方を明確に示せば、おそらく学生の多くは納得するであろうし、対応もできるであろう」（服部 2021: 24）。その際、DPと各授業科目との関連性を明示できれば、学生の納得感はさらに高まるのではないだろうか。

DPは大学での学びの達成目標であり、そのゴールにたどり着くために各授業科目

や教育プログラムが理屈上設定されているので、学生たちのDPの認知度を高めておくことは、大学での学びについて学生に教員と共通の理解をもってもらうためにも有効な方法の１つだろう。学生たちのDPの認知度を高めるためには、DPを明確かつ具体性のあるかたちで、わかりやすく提示する必要がある。それは、DPが文章として内容がわかりやすいということにとどまらない。DPとそれを達成するためのカリキュラムとの一体性・整合性をもっていることも重要になってくる。卒業時をゴールに見立てれば、そのゴールにたどり着くために途中にどのような教育プログラムがあるのかを、系統的に順次性をもたせて明示することも求められる。それらが絵に描いた餅にならないよう、まずは授業を担当する教員同士がDPやCPに関する共通理解をもち、それに立脚して教育活動をおこなうことも忘れてはならない。そのためにも教育改善を個々の教員の努力だけに委ねるのではなく、FDの実施や教学に関する組織的な調整、マネジメントが必要になってくるだろう。教員間でDPやCPに関する理解が異なるようでは、学生たちと教員が共通理解をもつことは難しくなり、ひいては学生たちの学びの質を低めることになるかもしれない。

「教える」と「学ぶ」のあいだには、「『教える』の成果は『学ぶ』に反映され、『学ぶ』の状況を把握して『教える』を改善・改革する」という相互関係があり、「どちらか片方だけ見れば、もう一方のあり方がよくわかるという構造」になっている（森 2021: 128）。つまり、学生たちの学びの状況は教員たちの教育活動と合わせ鏡の関係にあり、学生たちの学びの質には、教育の質が映し出されているということである。本学の学生と教員、そして教員同士が、大学で学ぶことについて共通理解を醸成することは、学生が納得感をもって学びに取り組むうえでも、教職員が教育の内部質保証に取り組むうえでも欠くことができないプロセスといえるだろう。

付記

「キャンパスライフに関するアンケート調査」の使用にあたっては、同志社大学学習支援・教育開発センターの許可を得た。

注

1）　ディプロマ・ポリシー（Diploma Policy）とは、大学における学位授与の方針のことを指す。その大学が、入学してきた学生に対して、卒業までに身に付けて

おいてほしい能力を設定したものであり、卒業認定、学位授与を決める際の基準になるものである。欧米では、ラーニング・アウトカムとよばれている（濱名2018）。

2）　2019～2021年度の３年分のアンケート調査データに限定した理由は、３つある。１つ目は、DPの認知度に関する調査項目が2017年度以降にしか含まれていなかったためである。２つ目は調査対象者の違いである。2018年度調査までは、14学部の在学生を対象に調査を実施していたが、2019年度以降は国際教育インスティテュートに在籍する学生も調査対象者に含めた。国際教育インスティテュートの学生は１学年、数十名と数としては大きくないが、2018年度以前の調査とは調査対象者の範囲が異なるため、2019年度以降に限定した。３つ目は、調査実施方法と有効回答率である。2018年度調査は、多くの学部でWEB調査と紙媒体の調査票を併用したため、有効回答率は４割をこえていた。しかし、2019年度調査で、紙媒体の調査票を併用した学部は２学部にとどまり、残りの12学部および１インスティテュートはWEB調査のみで実施した。結果､有効回答率は２割程度にとどまった。コロナ禍に突入した2020年度以降は完全にWEB調査のみで実施しており、調査実施方法に関する条件をできるだけ統一したほうが、分析結果のよみとりに留意する事項が少なくなると考え、2019年度以降のアンケート調査データに限定することにした。

付表１　2019～2021年度の「キャンパスライフに関するアンケート調査」の調査概要

調査年度	調査時期	１年次の有効回答		調査実施方法
		（件）	（%）	
2019年度	2020年３月下旬～５月上旬	1,317	21.4%	WEB調査＋授業等で集合調査
2020年度	2021年１月下旬～２月下旬	1,038	17.1%	WEB調査
2021年度	2021年11月初旬～11月下旬	1,145	18.3%	WEB調査

文献

中央教育審議会大学分科会，2018,「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」.
濱名篤，2018,『学修成果への挑戦――地方大学からの教育改革』東信堂.

服部憲児，2021,「コロナ禍における授業課題――学生の捉え方･対処法と大学教育への示唆」大学教育学会 研究課題「大学教育における質的研究の可能性」グループ編,『コロナ禍で学生はどう学んでいたのか――質的研究によって明らかになった実態』ジアース教育新社: 15-25.

堀和世，2021,『オンライン授業で大学が変わる――コロナ禍で生まれた「教育」インフレーション』大空出版.

光本滋，2021,『二〇二〇の大学危機――コロナ危機が問うもの』クロスカルチャー出版.

森朋子，2021,「本書のまとめ『コロナ禍と学び』」大学教育学会 研究課題「大学教育における質的研究の可能性」グループ編,『コロナ禍で学生はどう学んでいたのか――質的研究によって明らかになった実態』ジアース教育新社: 127-130.